二次元ぷち文庫

騎士道物語

～これも姫様の為だ！～

上田ながの

表紙イラスト：御幸やや

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『騎士道物語　～これも姫様の為だ！～【前編】』
『騎士道物語　～これも姫様の為だ！～【後編】』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

騎士道物語

～これも姫様の為だ！～

上田ながの
表紙／御幸やや

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

メリッサ＝シルバーグ

シュゼリア王国王女シュゼリア付きの近衛騎士。幼い頃から騎士になることだけを目指し、修行に励んできた堅物の生娘。

シュゼリア＝ファルメール＝シュゼリア

メリッサの主君。メリッサのことは姉の様に慕っているものの、時折容赦ない命令を下すことも。年頃らしく男に対して興味津々。

レナ

シュゼリア付きの侍女。メリッサとは同年齢で仲が良い。性にオープンな人間であり、多数の男と関係を持っている。

静かな夜のことだった。空には満点の星が煌めいている。美しい満月の優しい光を、メリッサ＝シルバーグは幼馴染みのロンと共に見つめていた。

カート村の小高い丘。村ののどかな景色から、リスフォード山脈、リザート大地までを一望できる。キシリング山から流れ落ちてくるカント川のせせらぎが静寂に包まれた夜には心地よかった。

ここから見える景色がメリッサは好きだった。

背中の中程まで伸びる金色の絹の様な髪を風に靡かせながら、碧色の瞳でジッとこの光景を見つめる。決して忘れることがない様に、網膜に映るものを目に焼き付けていった。

「いよいよ明日だな……」

ポツリッと横に座るロンが口を開いた。

「そうね……」

メリッサも頷く。

いよいよ明日だ――明日、この村を出る。

村を出るのは幼い頃からの夢だった。別に村が嫌いだからというわけではなく、寧ろ誰よりもこの村を愛していると思う。いや、村だけじゃなく、この美しい国――そのすべてを愛している。

だからこそ村を出るんだ。村を――この国すべてを護る為に。

騎士になるのだ。
「良かったな。騎士になるのはずっとメリッサの夢だったもんな」
ロンは素直に賞賛してくれる。幼い頃からずっと一緒にいてくれた彼からの賞賛は本当に嬉しかった。
（でも……何故だろうこの気持ち？　嬉しいはずなのに……）
不意に覚えてしまう寂しさに、何だか涙まで出てきそう……。
「じゃあもう行くわ。明日……早いから……」
生まれ出る感情を誤魔化す様に立ち上がり、ロンに背を向け、この場を立ち去ろうとする。情けない姿は見せたくない。特に彼にこんな姿を見せるわけにはいかないのだ。
「め、メリッサ！」
「え？」
腕がロンによって掴まれる。伝わってくる温かな彼の体温に、ビクリッと硬直してしまう身体。
「な、何？」
彼を見ることができないままに、剣の様に身体を硬くしながら漏らす声は、震えてしまいさえする。
「……俺」

紡がれるロンの言葉。思わずメリッサは息を呑む。

「メリッサのことが好きだ」

シンプルな告白だったけれど、心の奥底にまで染み込んでくる言葉に、何故だろう？胸の内が熱くなり、ツウッと眦（まなじり）からは涙が零れ落ちた。

ずっと本当の姉弟の様に育ってきた相手からの告白は唐突だったけれど、心の中に簡単に染み込んでくる。

「……私も……」

静かに口を開くメリッサの胸の中は、とても熱かった。

ロンの告白が嬉しくないはずがない。だってずっと彼のことが好きだったから……。

「……駄目」

が、それ以上の言葉は続かず、口をついたのは、拒絶の言葉だった。

ロンと一緒にいたい――その気持ちは強かったけれど、それ以上の想いがメリッサにはある。

騎士になり、この国を、国民を、すべての者を護りたい――子供の頃からの夢だ。これを捨てることはできない。

十年前、騎士だった父親を戦争で亡くした。家族の為、国の為に、平民でありながら騎士となり、死んだ父はメリッサにとって誇りだ。

（そんな父さんみたいな騎士になる）
父の貫いた騎士道を自分も貫く。この夢を捨てることなどできない。
「……だろうな。そういうと思った。ごめん、わかってて困らせる様なことをいって」
この時、ロンがどんな表情をしていたのかはわからなかったが、耳に届く彼の言葉は普段と何ら変わることがなかった。
「頑張れよメリッサ。絶対騎士になってくれよ。離れていてもずっと応援してるからな」
「うん」
静かに頷き、彼の言葉を心の奥底にまで刻み込む。
「じ、じゃあ行くわね」
「ああ」
彼の手が離されると、何だか急に心細くなったが、その気持ちを悟られまいとロンに対して一切視線を向けることなく歩き出す。彼が遠ざかっていくのを感じた。
（もしかしたら、これでもう二度とロンと会うことはないかも知れない）
騎士は国に仕える者であり、もうメリッサという個人ではいられない。
（国の命がなければ、もうここに帰ってくることもない……）
メリッサの足が止まる。
「どうした？」

幼馴染みの行動に疑問の声を上げるロンに、メリッサは無言のまま近づいていく。ドキドキと胸が早鐘の様に高鳴った。

「ぜ、絶対私……騎士になるから」

「あ……ああ」

「それに……ロンのことも忘れないから」

「え？」

「――んっ」

驚く彼に唇を重ねる。唇越しに伝わってきたのは、柔らかく、温かな感触……。口唇を重ね合わせるだけの可愛い口付けだったけれど、全身が熱く火照った。

*

「――ッ!!」

ガバッと身を起こしたメリッサの顔は、真っ赤に染まっていた。キョロキョロと落ち着きなく周囲を見回す。暗い部屋――頼りは窓枠から差し込む月明かりだけだ。

視界に映るのは、ベッドに小さな棚、執務用のデスクが置いてあるだけの飾り気のない小さな部屋だ。故郷の丘の上ではない。

「ゆ、夢……？　そ、そうだな……」

そこにロンの姿はない。ホウッと息を吐きながら、メリッサは自分の唇に指を添えたが、

すぐにそれを離し、首を左右に振る。
「あ、あんな夢を見るなんて……こ、この愚か者！　修行が足りない証拠だ‼」
自分に言い聞かせる様に言葉を吐いた。
そのままもう一度横になる。
（ま、まだ夜ではないか……。明日も早いというのに……。寝るのも騎士の務めだ）
あの丘の上での別れから、既に二年。今ではメリッサはシュゼリア王国の立派な騎士となっていた。それも、シュゼリア王国第一王女シュゼリア＝ファルメール＝シュゼリアの近衛騎士である。常に姫の傍らに付き添い、護衛から教育までを担う大事な役目。睡眠不足の顔を晒すわけにはいかない。
無理矢理瞳を閉じ、メリッサは眠ろうと努めた。
『メリッサのことが好きだ』
だというのに、瞳を閉じるとロンの顔が浮かびあがり、熱い視線で自分を真っ直ぐ見つめてくるのである。
『それに……ロンのことも忘れないから』
そういって自分から彼に口付けをしたシーンも、繰り返し脳裏で再生される。
（な、何を考えている。この様な破廉恥なことを考えるな‼）
騎士とは清廉潔白でなければならない存在であり、男のことを想像するなどあってはな

らないことだ。考えるべきは国民のこと、そして姫のことだ。

（姫様の為にも早く寝ろ。寝るんだ!!）

何度も自分自身に言い聞かせつつ、寝返りを打つのだが、寝よう寝ようと思えば思う程、焦りが募り、余計に目が冴えていく。

『メリッサだったら絶対立派な騎士になれるよ！』

『大丈夫。メリッサならできるさ』

忘れようと思えば思う程、ロンの姿がより強く思い浮かぶ上、まるで火でもつけられたかの様に身体中が熱く火照っていく。とても眠れる様な状況ではない。

「く、し、仕方ない……」

もう一度ベッドから身を起こすと、暗闇の中で自分の身体を見つめる。

身に着けているのは女らしさの欠片もない何処にでもある寝間着だ。騎士に女らしさなど必要ないと敢えて選んだ寝間着――だというのに、何故こうも女を感じてしまうのだろう？　寝間着の上からでもはっきりとわかる胸元が、呼吸に合わせて上下している。就寝の為下着を着けていないせいか、はっきりと半円を描く形までわかってしまう。柔肉の膨らみは、多分男の掌にも収まりきらないくらいだ。普通の女にとっては喜ばしいことなのだろうが、騎士にとっては無駄な贅肉にすぎない。

（何故こんな邪魔なものがついている）

腹立たしささえ覚えた。

そこから更に下へと視線を移していくと、次に視界に映ったのは鍛え上げられた下腹部だ。キュッと引き締まった腰はメリッサにとって自慢であるのだが、男の目には女のセックスアピールでしかないらしく、時折イヤらしい視線を感じた。尻も同じである。訓練によって引き締められたヒップはツンッと上向き、垂れるということを知らず、プリンッとした臀部（でんぶ）が曲線を描いていた。この尻にもいつも感じるのは好色な視線。

何処までも女の肉体としかいえない。騎士にとっては不要だというのに、何故自分はこんな女の肉体に生まれてしまったのか？　自分も男だったら……。

（いや、しかし……男だとあの醜いモノが……）

思い出すのは男の股間にぶら下がっているモノだ。あの何ともいえない不快な肉の塊。基本騎士は男所帯である為、何度かペニスも目撃したことがあるが、あんなものが自分についていたらと想像するだけで身が震える。

（あれは何といえばいいのだろう？　その、色黒で……それでいて先端部が赤くて、まるで亀の頭の様に膨らんでいて……しかも、あれがそ、その……ことをする時に大きくなるという。ここ、ことをするなどけ、穢らわしい！　お、男にあんなものがあるから、穢らわしい行為が世の中からなくならないんだ!!）

修行修行の毎日で、男と付き合ったことなどない。とはいえ、知識くらいはそれなりに

持っていた。城で暮らしていれば、イヤでも侍女達の話が耳に届いてくる。しかも、彼女達は積極的にメリッサに知識を教えてきたりもするのだ。

『イヤ……私は騎士だぞ。その様なことに興味は……』

『でもメリッサ様。男ってアソコが凄く大きくなるんですよ。普段はとっても小さいのに、気味悪いくらいにムクムクと……。ちょっとした短剣くらいの大きさですよ』

『え？　そ、そんな……!?　短剣って……そんな大きなモノがは、挿入(はい)るはずが……』

『いえいえ、大丈夫ですよ。だって女の身体って赤ちゃんだって産めるんですよ』

『え？　ええっ!?　いや、だからってそんな……か、身体が裂けてしまうぞ……』

『そんなことはないですよ。それどころか、その大きさがとっても気持ちがいいんです。とても熱いものが、私達の膣中(なか)を掻き混ぜてくれるんですよ』

『は、はぁああ……って、私はその様なことに興味などない！　く、くだらないことを聞かせるな!!　だ、第一こんな話がシュゼリア様の耳に入ったら……』

『大丈夫ですよ。シュゼリア様には言いませんから。それに……メリッサ様も好きでしょ？こういう話……』

『な、何をいう！　わわ、私はそ、その様な話は……』

興味ない興味ないと、何度も侍女達に言い聞かせる。ただ、話を聞いている時のメリッサの表情は好奇心に満ちあふれており、視線は無言のままに話の先を彼女達に促してしま

っていた。ただ、メリッサ自身は気付いていないのだが……。
（何故私にそんな話を聞かせる⁉　わ、私はその様な穢らわしいことに興味はないのに‼は、話されたところで理解もできないぞ）
とはいうものの、聞かされ続けた話のお陰で、妙にリアルに肉棒を想像できてしまう。硬く立ち上がったペニス。そんなものがロンにもついているのだ。
（だ、駄目だ！　か、考えるな‼　破廉恥な想像など騎士がすべきことではない‼）
思い浮かべてしまうのは、ロンの裸だ。そしてそそり立つ彼の肉棒。慌ててこの想像を振り払おうとするのだが、一度思い浮かべてしまったモノは消すことができない。
多分ロンのモノは大きく、そして太くて硬いのだ。肉槍には血管が浮かび、ビクンビクンと震えている。亀頭部はきっと綺麗なピンク色。先端の肉先秘裂が呼吸する様に蠢(うごめ)いている。
「はぁはぁはぁ……」
自然と荒くなっていく息。無意識のうちにメリッサの手は自分の股間に伸びていく。寝間着のパンツの中に手を入れ、ショーツの上から自分の陰部に触れた。
「うんっ……あ……く、な、何故だ……」
下着に触れた指先に湿った感触が伝わってくる。ジンジンと疼く性器は、既に湿り気を帯び始めていた。

「うう、まただ……な、何故だ？　何でこんなに濡れてる……くそ……こ、これはた、単なる生理現象だ。お、女なら誰だってこうなってるんだ。何でこんな面倒な身体なんだ！」
自分の身体に怒りの言葉を向けながら、
（気にするな。さっさと寝ろ）
と心の中で言い聞かせ、指を離してベッドに再び横になる。
しかし、脳裏に浮かぶロンのペニスを振り払うことができない。何度も太股を擦り合わせ、小さく腰を前後に振った。
「……こ、これは明日に支障を起こさない為だ」
再び身を起こすと、自分に言い聞かせる様に呟く。
「べべ、別に破廉恥な行為じゃない。こ、これはその……あ、あれだ……騎士として自分の状態を落ち着ける為だ。き、休息には必要な行為だろ」
別に必要もない自分への言い訳を吐きながら、自らパンツを下ろし、ショーツを脱いだ。
白い太股が露わになる。金色の陰毛に隠された恥丘も視界に映り込んだ。ムチッと肉付きのいい太股はうっすらと汗ばんでいる。陰毛から覗く秘裂は、僅(わず)かに左右に開き、桃色の肉襞が見えた。蜜壺からは女蜜が溢れ、恥肉(ちにく)が湿り気を帯びている。
（さ、さっさと終わらせる）
自分の肉体とは思えない淫靡(いんび)な光景に一度喉を鳴らした後、アソコに手を伸ばした。中

指でそっと恥部に触れる。
「んんっ」
チュクリッという感触と同時に、痺れる様な刺激が走った。思わず甘みを含んだ吐息を漏らしてしまう。一瞬手を離すと、ツッと僅かに糸が伸びた。
「く、な、なんていやらしく濡れてるんだ……し、しかし……これも任務の為だ」
もう一度言い訳を口にしながら、再び肉襞に触れる。ただ触るだけではない。秘裂に沿って、中指を動かし始めた。チュコチュコと上下に擦り上げていく。
「は、んんっ……はぁっはぁっはぁっ……」
柔肉を指先でなぞるたび、ピクッピクッと肢体が震えた。
襞の一枚一枚に刺激を加えていくと、それだけでジュワリッと愛液が溢れ出し、膣口から尻へと淫水が流れ落ちていく。
「ふ……んっんんっ……」
必死に唇を噛み締めつつも、荒い吐息を漏らしながら、僅かに腰を浮かせる。行為を続ければ続ける程、全身から力が抜けていく様だった。
溢れ出す愛液で指先から手首までが濡れそぼっていく。
じゅぐっ、ちゅぐ、くちゅちゅ、じゅちゅるるぅ……。
陰部に触れる手を動かすだけで、淫らな水音が耳に届いた。

「んっ！　あっ、あっあっあっ」
無意識のうちに空いた手を自分の乳房に伸ばしてしまう。寝間着の上から胸を揉む。指が柔肉に食い込み、乳房は簡単に形を変えた。くすぐったさにも似た感覚が走り、これまで以上に艶やかな声が漏れ出てしまう。
「んふっ、ふんんん……はぁはぁ……」
それでも行為を中断しようという思考は生まれてはこなかった。身をくねらせながら、メリッサは自分の身体を慰める。何度も乳房を揉みしだいたかと思うと、親指と人差し指で自分の乳首を摘んで転がした。それだけでピクッピクッと身体が跳ねる。肌はいつしか桜色に上気し、荒い吐息を漏らすピンク色の唇は半開きとなった。腰を動かすたびに、ベッドが軋み、シーツが衣擦れ音を鳴らす。
「ろ、ロン……そ、そんなところ……だ、駄目よ。さ、触っては駄目……」
自慰を続けるメリッサの脳裏に浮かぶのは、幼馴染みの姿だった。
『何が駄目なんだよメリッサ。ほら、君の大切な場所はこんなに濡れてるよ』
「いやっ、い、いわないで……あっ、んんあっ！　そ、そんな、膣中（なかに）になんか指を挿入（い）れないで……そんな無理……んっ！　ああっ！」
ジュブリッと指先を柔肉の海に沈める。男を知らない肉体に自分の指が潜り込んできた。膣壁に指が触れると、柔肉が細指に絡みついていく。柔らかなその感触を感じながら、く

の字に指を曲げ、グチュグチュと愛液を掻き混ぜた。
「んふっ、ふーふーふー」
大きな悲鳴が漏れそうになり、慌てて布団の端を唇で噛む。この様な淫らな声を上げてはならない。何処かに残った理性がさせる行為だった。
「ふんんん」
唇を塞いだまま、膣中を掻き混ぜる。同時に乳房に対する愛撫も続行した。
肉欲の昂りの為か、既に乳首は勃起している。睡眠時だった為、ブラジャーも着けてはいない。その為、勃起した乳頭が寝間着の上からでも確認することができた。見える先端部を自分の指で摘む。クリクリと転がし、何度か引っ張った。
（あ、凄い。お、おっぱい……か、感じちゃう……）
自分の乳首をロンに咥えられている場面を想像する。ロンが乳頭を甘く噛み、舌先で転がしてくるのだ。想像だけで溢れ出す愛液により、秘部が更に湿っていく。
『ほら、もうイきそうだろ？　イっていいよメリッサ』
優しく彼が語りかけてくる。
「んんっ、ふんーふんーふんー」
必死に首を横に振った。騎士がイクなど有り得ない。それを想像の中の幼馴染みに伝える。が、その間も陰部、乳房に対する愛撫を止めることはなかった。ガクッガクッガクッ

と何度も腰が前後に揺れる。
（駄目。く、来るっ……アレがき、きちゃうっ!!）
熱い感覚が膣中から湧き上がってくる。
じゅぐっじゅぐっじゅぐっじゅぐっ！
それに合わせる様に、自慰行為も激しさを増していった。ジュポッジュポッと音を立てながら、指を激しくピストンさせる。
「んーんーんーんんんんっ!!」
ビクンッと身体が弓形に反った。腰が大きく突き出される。膝が震え、桜色に染まった全身が何度も痙攣（けいれん）する。切なげに眉を寄せながら、心地いい快楽に酔った。
（あ、い、イッてる……き、気持ちいい……）
絶頂感が全身を包み込み、身体中から力が抜けていった。
「は……はぁはぁはぁ……」
心地いい脱力感を覚えながら、ゆっくりとメリッサは瞳を閉じる。

＊

「ん、んん……眩し……はっ!!」
窓辺から差し込む日の光に照らされ、メリッサ＝シルバーグは身を起こした。小鳥のさえずりが聞こえる。

「あ、朝か……く、ま、またか……」

何度か目を擦り、窓の外に見える王都の光景を見つめた後、自分自身へと視線を移したメリッサは自分の不甲斐なさを嘆いた。

ベッドは乱れ、下半身は露出されたまま――騎士の見せる姿ではない。

（何故だ……何故こんなことを繰り返してしまう？　ま、毎晩じゃないか……）

あまりに自分自身が情けなかった。毎日、朝起きると同じ後悔をしてしまう。朝から気分は最低なまでに落ち込んでしまった。

「いや、気を取り直せ。私はシュゼリア様の騎士だ。落ち込んでいる暇などないぞ！」

だからといって沈んだままではいられない。姫の為に剣を捧げる騎士としての職務が待っている。自分の頬を叩いて気合いを入れると、ベッドから降りた。寝間着を脱ぎ、肌を晒す。

白い裸身が日の光の中に浮かぶ。乳房から括（くび）れ、ヒップまでの滑らかなラインがメリッサの女を際立たせていた。晒された乳頭は桜色。乳輪はそれ程大きくはない。

そのまま一度浴室に入り、自分の身体を清めた後、惜しげもなく晒した肢体に、騎士の礼服を着けていく。蒼を基調とした近衛騎士の制服だ。動きやすさを考慮し、ぴったりとボディーにフィットする素材で作られている。スラリとしたメリッサの身体にはよく似合っていた。下半身は白いパンツズボン。腰には過剰な装飾がなされた剣を下げる。

平民出身のメリッサにはあまりにきらびやかすぎる衣装だったが、王族の近衛騎士には

見栄えも重要なのだ。
「よしっ……行くぞ」
自分の姿を鏡で確認し、うむっと頷くと、部屋を出る、向かうは主であるシュゼリア＝ファルメール＝シュゼリアの部屋だ。
「あらメリッサおはよう」
そこに向かう途中、友人の侍女であるレナと出会った。今年で十八才になる彼女はメリッサと同年齢である。その為か仲が良かった。
「ああ、おはようレナ」
「今日も美しいわねメリッサは。どう？　男の一人や二人でもできた？」
「な、何を馬鹿なっ!!」
朝一の問いかけに、カアッと女騎士は顔を赤くする。
「あ、朝っぱらから破廉恥なことをいうんじゃない！」
「破廉恥って……楽しいわよ男は。可愛いしね。あんただってそんなに綺麗なんだから、男なんて簡単に落とせるでしょ？」
「ふふ、巫山戯(ふざけ)たことをいうなぁっ!!　わ、私は騎士だぞ。お、男になど興味はない」
レナは相手がどんな身分の人間であっても気さくに言葉をかけ、態度が変わることがない。それでいて尊大な態度というわけではなく、本当に気持ちよく付き合える相手の一人

だ。が、そこが玉に瑕である。
こうしてずけずけとメリッサをからかってくることが多々あった。
「嘘をつくんじゃないわよ。ねえ、正直になってよ。私はね、心配なの。本当は男に興味津々な癖に、無理して強がってる貴女が。友達として本気で心配してるのよ。でも、まあ余計なお世話か……貴女には故郷に残してきた幼馴染みがいるしね」
「ろ、ロンのことは関係ないだろっ!!」
「あ、ほら……顔が赤くなった」
ケラケラとレナは笑う。
「うう、五月蠅(うるさ)い！　わ、私はシュゼリア様の所に行かねばならんのだ。こ、ここで失礼する」
口ではとてもではないが彼女には勝てない。逃げる様にその場を去り、シュゼリアの部屋をノックした。
「シュゼリア様……メリッサでございます」
近衛騎士は主の身の回りの世話もしなければならない。騎士であり、侍女の様な役割も果たしていた。当然、朝に主を起こすのもメリッサの役目である。
「シュゼリア様？」
だが、何度ノックして言葉をかけてもシュゼリアからの返事はない。

「またか……失礼致します」
一度呆れたように溜め息を吐くと、室内からの返事も待たずにドアを開けた。
部屋の中には大きな天蓋付きのベッドが置かれている。ピンクを基調とした可愛らしい作りのベッドだ。その上には幾つもの人形が置かれ、その人形に勝るとも劣らない可愛らしいお姫様がすやすやと眠っていた。
メリッサ以上に眩しい鮮やかなブロンドヘアの少女。顔立ちは何処か幼さが残っている。それでいて眠っていても溢れる程の気品を感じた。
彼女こそがシュゼリア王国第一王女シュゼリア＝ファルメール＝シュゼリアである。
「おはようございます姫様。朝でございますよ」
ベッド脇に立ち、彼女に声をかけた。
「ん、うんんん」
しかしシュゼリアは目覚めない。寝返りを打ち、布団の中に顔を沈める。
「起きて下さいシュゼリア様。朝食の時間になってしまいますよ」
「も、もう少し……後五分だけぇ」
次の言葉には返事があった。
「駄目です。決められた時間にちゃんと起きるのも王族の務めですよ」
本当に眠そうな声だったが、容赦しない。

「や、やだぁ～」
「なりません！」
メリッサは言葉と共に掛け布団を掴むと、それを問答無用で剥ぎ取った。
「あ、いや～。寒い～」
スラリと長身なメリッサに比べて小柄な身体つきが露わになる。シュゼリアは自分の身体を抱きしめるとブルブル震えてみせた。
「もう少し。もう少しだけだからぁ～」
「なりません。ほら、起きなさい！」
「うう～、メリッサお姉さまの意地悪～」
プウッと姫様が頬を膨らませる姿は、メリッサの目から見ても本当に可愛らしいモノだったが、だからといって甘くはしない。口うるさい母親の様な言葉をかけ、シュゼリアをベッドから追い出した。
「まだ眠いのに～」
「駄目です。ほら、着替えますからバンザイして下さい」
「は～い」
まだ眠そうに瞳をシパシパさせつつも、姫は素直にバンザイする。メリッサはその彼女の寝間着に手をかけると、それを器用に脱がせた。

シュゼリアの幼児体型が露わになる。ほとんど膨らんでいない胸に、括れもない腰だ。だからといって魅力がないというわけではない。絹の様に滑らかで透き通った白い肌には、女であるメリッサでさえも一瞬見惚れてしまう。

「どう？　女らしくなった？　これなら男の人とも付き合えるかなあ？　どう思うメリッサお姉さま？」

いいながらシュゼリアは得意げにセクシーポーズを取ってみせた。貧相な身体つきなので若干悲しい。

「巫山戯たことをいわないで下さい。あ、貴女は国を担う大事な身なのですよ。か、軽々しく男と付き合うなどいうものではありません‼　シュゼリア様はそんな馬鹿げたことに興味を持つよりも、国の為にもっと大切なことを学んで下さい！」

「え～！」

「え～じゃありません‼」

ピシリッと姫を叱る。するとシュゼリアはシュンとしながらも「は～い」と頷いた。その姿がまた可愛らしい。

「わかればいいのです」

メリッサは微笑み、優しくシュゼリアの頭を撫でながら、彼女にドレスを着せていく。今日のドレスはピンク色。姫様お気に入りのドレスだ。

「えへへ」
自分が好きなドレスを着て、彼女は嬉しそうに笑った。
「今日も頑張るね。シュゼリアが頑張ればみんなが幸せになれるんでしょ？」
「その通りです」
多少我が侭なところはあるけれど、本当に可愛らしく、聡明な姫様である。メリッサは彼女に仕えていることが誇りだった。彼女の為であれば死ぬことだって厭わないだろう。

シュゼリアの一日は勉強と執務の一日である。国の元首として父である国王がいるものの、王族としてすべきことは多々あった。これに対して姫は、
「もう休みたいよ～」
と何度も訴えかけてきたが、メリッサはその尽くを「駄目です」の言葉で却下した。まだまだ少女であり、遊びたい盛りであるシュゼリアには正直辛いこともあるだろう。彼女が休みたがる気持ちもわかるし、少しぐらい休ませてあげたいという気持ちもあった。
しかし、彼女は王族なのだ。彼女の成長が国の繁栄に繋がる。だからこそ、メリッサは彼女を甘やかす様なことはしなかった。
ただ、その分、王族の仕事に直接関わってこないであろう訴えは可能な限り受け入れた。それがどんな我が侭な命令であったとしてもだ。シュゼリアだって耐えている。ならば自

分も耐えなければならない。それが主君に対する忠義――即ち騎士道だ。

「ちょっと城の外を見てみたいな。ね、いいでしょ？」

シュゼリアがそんなことを言い出したのは、この日の行事も終わった後の時間のことである。

「え、いや……それは……」

「いいでしょ？　ねーねー、ちょっとお散歩するだけだからさあ」

既に空には夕闇が広がり始めていた。王都は治安がいいとはいえ、王族が気軽に出歩いていい時間帯でもない。が、シュゼリアは今日一日頑張った。文句をいいながらも、民の為に立派な指導者になる為に励んだのである。

「……わ、わかりました。少しだけですよ」

もし姫を狙う者が出てきたとしても、自分が護ればいいだけだ。実力には絶対の自信がある。少し考えた後、姫に対して頷いてみせた。

「あ、ありがと～。えへへ、だからメリッサお姉さま好き～」

これに喜び、抱きついてくるシュゼリアは本当に可愛らしかった。

＊

そして――メリッサは後悔した。

ギシッと軋ませながらベッドに乗ると、尻をレナ達に向ける。
（ま、まるで犬の様な恰好ではないか……）
屈辱的な姿勢だった。世の女は本当に男に対してこの様な姿勢を作るのだろうか？
「恥ずかしい？　でも、その恥ずかしさが快楽になるのよ。じゃあゲバルトお願い」
「あ、ああ」
上官に対する行為にゲバルトも緊張しているらしく、何処か上擦った声で頷きながら、剥き出しの下着に手を伸ばしてきた。
彼の掌がショーツの上から尻を撫で始める。優しい手つきで、執拗に尻の感触を楽しんできた。
「く、う、うう……」
臀部のラインを男がなぞっていく。ただ撫でるだけではなく、時折掌でむっちりした両尻を掴み、揉みほぐしてもきた。優しい愛撫が続く。レースのショーツに皺が寄った。
（お、男にこの様なことをされるなんて……）
恥ずかしさを通り越し、屈辱的ですらある。それでも歯を食いしばり、必死に与えられる行為を耐えた。
「どう？　気持ちいい？」
レナが問いかけてくる。

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

「……き、気持ちいいわけあるか……き、気色悪いだけだ……」
この様な行為の何処に気持ちよさがあるのか？　セックスは気持ちがいいというレナの言葉が、益々嘘っぽく思えてくる。
「ふ～ん、じゃあゲバルト……今度は……」
「わかった」
レナがゲバルトの耳元で何かを囁く。すると彼は頷き、指を尻肉から肛門の方へと移動させてきた。下着の上から尻穴に指を這わせてくる。
「ひあっ！　そ、そこはっ⁉」
反射的に悲鳴を上げてしまっていた。
「そこはって……勿論アナルよ。その穴でこれからセックスするんだから、解しとかないと辛いわよ」
「ほ、解す？」
「ええ」
レナの頷きと共に、ゲバルトの指が円を描きながら下着越しに尻穴をなぞってきた。ゆっくりと指先が螺旋を描く。
「んくっ……く、んくぅ……」
くすぐったさにも似た感覚を覚えた。やがて指は縁から穴へと辿り着く。下着を巻き込

みながら、ほんの少し肛門へと沈み込んできた。
「ひっ！　ひぃっ‼」
怯えにも似た悲鳴を上げ、思わず逃げようとしてしまう。だが、その身体をレナが押さえ込んできた。
「駄目よ逃げちゃ。これくらい耐えなさい。シュゼリア姫様の騎士でしょ！」
侍女にいわれる様な言葉ではない。
「わ、わかってる‼」
意地になった様に答えを返した。
「では続けますよ」
ずぶ、ずぶずぶ……。
下着を巻き込みながら、指が肛門の中に沈み込んでくる。
「うあっ！　ん、くひっ……ちょ、こ、こんな……おっおっ……のおかしい！　んんんんん、おかしいだっろ！」
普段排泄する為だけの器官を逆流してくる感覚に心地よさなどない。それどころか痛みさえ感じてしまう。
「おかしくないわよ。すぐに慣れるから。ゲバルトは上手いんだから。ただ突っ込むだけじゃないのよ」

この言葉通り、ゲバルトの行為はここからが本番だった。
突き入れられた指が、まるで尻の穴を拡張するかの様に肛門内で円を描いた。
「ひっくひっ！　な、何これ……お、お尻の、か、壁を……触ってる。お、お尻が広げられていくみたい！」
緩慢な動きだったが、それがより刺激を強める。クリクリと肛門付近を弄(いじ)られる感触は、排泄時にも何処か似ていた。
「んくっ！　こ、これは……ふぐっ……き、気持ち悪い……こ、この様な行為き、気持ち悪いだけだぁ……」
「ふふ、初めはみんなそう思うの。知らない感触だから気持ち悪いって……。でもね、本当は違うのよ。ほら、メリッサだってうんちする時気持ちがいいでしょ？」
「そ、そんなことない！」
「嘘をついたってだ～め。ほら、そろそろお尻を見せなさい」
「んひあっ……」
一度肛門から指が引き抜かれる。途端に悲鳴が漏れてしまった。この声をクスクス笑いながら、ゲバルトではなくレナがショーツを引き下ろす。それと共にゲバルトが臀部に手をかけ、大きくそれを左右に開いた。尻の割れ目が開き、人として最も恥ずべき場所が晒される。

「み、見るなっ！　駄目だ！　そんなところは見ないでぇっ‼」
これは流石に耐え難かった。少女の様な悲鳴まで上げてしまう。
「見ないでぇ――って、メリッサらしくないわよ。ふふ、でもこっちの穴も貴女らしくないか。ほら、ちょっと弄っただけでポッカリ穴が空いちゃってる」
色素の薄い肛門は、レナの言葉通り黒い穴を開けていた。呼吸するみたいに、大きくなったり小さくなったりしている。
「そ、そんなことない！　あ、穴なんか空いてないっ‼」
自分の肉体がその様な反応をすることなど、絶対にない。必死に否定するが、レナ達はこれを笑った。
「いいえ、貴女には見えないでしょうけど。ポッカリ穴が空いちゃってるの。でも、これじゃあまだおちんちんを挿入れるには小さいからね……。もっと大きくしてあげる」
「お、おおき――ひっ！」
ぶちゅっ！　ちゅぶるるぅ……。
一体何をするのか――などと考えている暇さえない。突然レナの顔が尻に近づいてきたかと思うと、容赦なく肛門に唇を這わせてきた。
「だ、駄目だ！　そ、そんなトコ、き、汚いっ‼」
「んふふ、きちゃなくなんかなひわよ……。しゅこしくしゃいかもしれらいけろ」

「い、いうなぁ」
友人に尻の穴が臭いといわれる。耐え難い程の恥辱だった。
こちらのその様な感情に当然レナも気付いているだろう。が、行為を止めてはくれない。
レナの行動はキスをするだけでは終わらなかった。
んじゅっ！　ちゅぶっ、ぶちゅぶっ！　ちゅっちゅちゅぶるるぅ……。
「くひっ！　な、舐めてる……お、お尻の穴なんか舐めるなぁ。汚い。汚いからぁ」
「らいりょぶらいりょぶ……んちゅちゅちゅぅ……」
肛門にできた皺の一本一本に舌を這わせつつ、腸内にも舌先を潜り込ませてくる。内臓を内側からブチュグチュと音を立てて舐められた。
「ひっひっひっ！　くひっ!!」
刺激を与えられるたび、ビクッビクッと身体が震える。しかも、レナの愛撫はただ舐めるだけではない。
「んふふ、いっぱひながひこんれあげる……」
ぐちゅ、ぶちゅぐるるぅ。
「んああっ！　は、はいって、く、る……な、なにこっれ？　なんか入ってくるぅ!!」
彼女は肛門内に唾液まで流し込んできた。生温かいモノが尻に広がる。温かさにふやけるかの様に、尻から力が抜けていった。電流でも流されたかの様に身体を震わせながら、

必死に尻を左右に振った。
菊座が開いていくのがわかってしまう。パクパクと開閉を繰り返す肉穴。何故かわからないが、肛門を舐められていると、蜜壺までが熱く疼いた。愛液が秘部を濡らす。
ぶちゅぽっ……。
「ん、あ……へぁあ……」
やがて唇が肛門から離れていく。レナとゲバルトがキスをした時の様に、唾液の糸がだらりと垂れ下がった。
「これで大分解れたでしょ。じゃあ次はおちんちん……」
男性器の名前が出された途端、全身が硬直する。
「といいたいところだけど。まずはコレね」
今回はフェイントだった。ペニスの代わりにレナが取り出してきたのは、幾つものビーズが繋がり合った様な器具である。
「な、何それ？」
「アナルビーズよ。コレでおちんちんを迎え入れられるように、更に貴女のお尻を広げるの……」
「ひ、広げるって……そ、そんなの入るわけない……」
自分の尻の穴がどれ程の大きさかなんて知らないけれど、一個一個が丁度掌に一個握れ

る様な石くらいの大きさをした異物が入るとは思えなかった。
「さ～て、それはどうでしょう？」
ニヤニヤ笑いながら、肛門にアナルビーズを密着させてくる。そして――。
ムリッ、ムリムリムリィッ！
「お、おっおっおおおっ！　むっり、さ、さけっる、お、お尻が、さ、裂けちゃうっ‼」
挿入が始まった。
肛門が拡張される。それと共に直腸も押し広げられていった。唾液混じりの腸液が肛門から押し出され、流れ出る。
「あ、あなっ！　穴があいちゃっう！　わ、私の身体に穴が空いちゃうからぁっ‼　こ、こんなのむっり、無理なのぉっ‼」
下腹部に杭を打ち込まれていくかの様な感覚だった。息さえも詰まる。
「――か、かっは、は、っはぁあ……」
瞳を見開き、悲鳴にならない悲鳴を上げるが、レナは何の容赦もしてくれなかった。
「凄い凄い！　いきなり奥まで入る‼」
それどころか喜んでさえいる。
「凄いですね。いきなりここまでは入らないモノなんだけどなぁ」
ゲバルトも感心の声を上げていた。

「んぶぇっ！　んぶっ！　おぼっ、おぼぇっ‼　んぇぁあああっ‼」
大量射精がメリッサの顔を襲った。流石に三人同時だと尋常な量ではない。冷淡で美しいメリッサの顔は、まるでザーメンでパックでもされたかのような有り様に変えられてしまった。

「お、俺達のを一緒に咥えて下さい」
「交互なんて我慢できないんです」
二人の男がメリッサの前に立つ。突き出される二本のペニスが、ビクビクと互いに自己主張をしてきた。
「い、一緒にってそんなのむ――んぼっ‼」
ぐじゅぼっ！
興奮しきった男達は、こちらの言葉を最後まで聞いてくれない。口を開いている最中に、二本の肉棒が同時に女騎士の口腔へと差し込まれた。
「お、おっおっおっ、こ、こんらっの、こ、こふぁふぇる、わ、わらふぃのくふぃが、こふぁれひゃう」
限界まで口が開かれる。今にも裂けてしまうのではないかとすら思った。
「大丈夫ですよ。そんな簡単に人間は壊れません」

えっちなシーン試読みここからスタート！

「そうですよ。それじゃあいきますよ！」
男達は宣言と同時に腰を振り始める。
ぶびょっ、じゅぽっ、ぐじゅっぽぉおおっ!!
「むひょっ!? おぼっ！ ちょ、とまっ――んぼっんぼっんぼぉっ!!」
本能の赴くままに腰を振る男達の動きには、なんの容赦もない。メリッサへの気遣いなどまるでなく、何度も肉棒を撃ち込んできた。頬が内側から膨らむ。じゅぽっじゅぽっと抜き差しが繰り返されるたび、多量の唾液が溢れ、口周りがべちゃべちゃに穢れていく。
（こ、こわれっる、私が、私が壊れる……おかしくなるぅ……）
「んじゅ、ちゅぶっ、ちゅずる、んじゅぶる……おえっ、うえぇえっ……んじゅっ、んじゅう……」
が、そんな状態でも、女騎士は舌を動かし、ペニスに絡めた。何度咳き込みつつも、口奉仕は止めない。自分で意識せぬままに、メリッサは男達を愛撫していた。
「も、もう駄目だっ！ 射精るっ！」
「くああ、さ、さいこ～すぎる!!」
男達が歓喜の声を上げ、同時射精を開始する。
ぶびゅぼっ！ どびゅるっ！ ぶびゅるるるっ!!
「んぷぁああっ！ んぶえっ、あ、あぢゅいっ、べちゃべちゃ、わ、わたひ、また、べち

やべちゃらよぉっ!!」

顔面射精される白濁液に塗れながら、女騎士はうっとりと瞳を細めた。

「はひゅーはひゅーはひゅー」

それから一体何人の精液を浴び続けただろうか？　残り一人になった頃には、メリッサの肉体は牡の精臭がすっかりこびり付いてしまっていた。口も半開きのまま閉じてくれない。何度も白濁臭混じりの息を吐く。自慢の美しい髪も、ザーメンがベッタリと付着し、ガチガチに固まってしまっていた。

「い、いくろぉ……んぷぁあ」

最悪な状態だったが、自ら口を開き、最後の男のモノを口にする。最後のペニスはそれ程大きなモノではなかった。長さも普通で、恥垢も特についていない。臭いは……正直もう鼻はきかなくなっているのでわからなかったが……。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

「んふっ、ふん、んちゅ、ちゅぷるるぅ……」

初めの頃の様に戸惑うことはない。まるで熟達した娼婦の様にスムーズな動きで、ペニスへ舌技を加えていく。裏筋を舐めあげ、手で優しく睾丸を揉み、亀頭をじゅずずっと下品な音を奏でて何度も啜った。

「う、すげっ、う、上手すぎる！　こ、こんなの耐えられねぇよっ!!」
十九人の男達で培った技が、男をすぐに絶頂へと押し上げる。この声を聞き、女騎士は咥えていたペニスを放そうとしたのだが、男の腕が後頭部に廻った。
「んぐっ!!」
頭を押さえつけられ、動くことができない。
「い、いくぞぉっ!!」
その状態のまま言葉と共に腰を振り始める。
じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ！
「おびょっ!?　もっもっもっもほぉおおっ！　おっ、おびょっおびょぉっ!!」
予想外の行動に対応ができない。されるがままに喉奥を何度も突かれた。ピストンが一回行われるたびに、肉棒は太さを増す。
「うあっ、だ、射精すぞぉっ!!」
「お、おぼっ、おっ――おひょっ!!」
ズブッとこれまで以上に喉奥までペニスが突き込まれた。そして――
どびゅばっ！　びゅぶっ！　どびゅっ！　びゅっびゅっびゅっ、どびゅぼぉおおっ!!
「んびゅえっ！　むひょっ!!　お、おっほ、むほぉおおおっ！　ぶべっ、うぶええっ!!」
（な、なんだこっれ？　お、おおすぎっる!!　お、おぼれっる、こんなの溺れちゃう

っ!!)

白濁液が流し込まれる。が、今回の射精は今までの男達の比ではなかった。

「んひょっ!!」

一瞬で口腔が白濁液で満たされてしまう。プクッと頬が白濁液で内側から膨れ上がるだけでは収まらず、鼻からもビュバッと鼻水のように精液が飛び散った。

「あ、あふ……ふ……おふぁ……おえ、おええぇっ!」

ジュブッと口腔からペニスが引き抜かれる。何度も女騎士は白濁液を吐き出した。両鼻からは鼻水のように白濁液が垂れ流れ続けている。その姿はあまりに無様なものだった。

「凄いっ! 本当にみんな終わった。流石メリッサお姉さま!」

この様子に姫君は無邪気に喜ぶ。自分が下した命で家臣が危機に陥っても決して心を動かさない——メリッサの教育の成果である。

「わ、私はひ、姫様の騎士ですよ……はぁーはぁー……こ、この程度できて当然です」

シュゼリアに向かって顔中をドロドロに穢しながら女騎士は笑みを浮かべて見せた。

(だが……本番はここからだ……)

ワイングラスにはなみなみと白濁液が注がれている。液体というよりもゼリーなのでは? と言えるくらいに、注がれた牡汁は濃厚なものだった。グラスに触れるだけで、生温かさが伝わってくるのが不快である。

「はぁはぁはぁ……」
息を整える。全身が熱く火照っているのを感じながら、グラスザーメンを姫の前に掲げて見せた。
「で、では……いただきます」
一言告げ、グラスを口に運ぶ。噎せ返るような精臭が鼻をついた。
(だ、大丈夫だ……く、薬を飲むのだと思えばいい……)
自分自身に心の中で何度も言い聞かせながら、グラスの縁に口をつけると、ゆっくりとそれを傾けた。濃厚すぎる汁が、ドロドロと流れ出す。グチュリッと唇に密着する熱液を感じながら、じゅずっ、じゅずずっとそれを飲み始めた。
じゅぞぞっ、ぶじゅぞぉ……。
「んぐっ……ぐっぐっ……んぐっ……ごきゅっ、ごきゅっごきゅっごきゅっ……」
濃厚すぎる為、普通に傾けただけではなかなか口腔に流れ込んでこない。その為、卑猥な音が響いてしまうことも我慢して、激しく吸引する必要があった。
口の中に白濁液の苦味が広がっていく。
「んぷっ……うえっ、げぼっ……おええっ……ごきゅっごきゅっ……」
喉奥にプルプルした粘液が引っかかり、何度も咳き込み、吐瀉しそうになってしまったがそれを必死に耐え、何度も喉を上下させた。

（ひ、広がっていく……わ、私の中に熱いのが広がってく……。苦い……き、汚い……）
とても美味しいといえるモノではない。けれど飲むのを中断するわけにはいかず、喉奥に流し続ける。
んじゅっ、ごきゅっ、ずずずずぅっ……。
（うう、ま、不味い……不味いのに……な、なんで？）
そうして飲み続けているうちに、メリッサの身体には変化が起こり始めていた。理由はわからないのだが、汚汁を飲んでいると、何故だか全身が更に熱くなっていく。下腹部が熱を持ち、疼き、何度も腰をくねらせてしまった。
「んふっ……ふぇぁ……んぐっんぐっ……」
プルプルとした食感が食道を流れ落ちていく。口腔を動かすと、歯ごたえさえ感じた。舌や歯の裏側に牡汁が絡みついていく。
「あ……う……うぷっ……」
やがてすべてを飲み干した頃には、メリッサの口周りはすっかりザーメンでべとべとに汚れてしまっていた。
ちゅぷ、くちゅぷるぅ……。
それを舌で舐め取っていく。女騎士の艶やかな舌が艶めかしく蠢き、残り汁を絡め取っていった。

「はぁはぁはぁ……うぷっ……ご、ごひほうさまでひた……うぇえっ……」
うぷっと吐く息からは精臭しかしない。それでもご馳走様と頭を下げたのは、姫に対してどんな状況でも礼儀を忘れるなという教育の為である。
「味は？　味はどうだったの？」
シュゼリアは興味津々といった様子で尋ねてきた。
「あ、味は……おえっ……す、凄くに、苦くて……まじゅいです……」
「ふ～ん、不味いのかぁ。レナの話とは違うんだね。それとも……メリッサお姉さまの味覚が違うのかなあ？　あ、そうだ！　そういえばレナがいってた。精液の味は、味覚じゃなくて身体で感じるものだって」
ポンッと嬉しそうにシュゼリアは手を叩く。
「なんか精液を飲むと、身体が熱くなって、凄くフワッとした気分になってくるんだって。それで、アソコが濡れちゃうって聞いた!!　ねえ、ここでメリッサのアソコを見せてよ」
「そ、それは……」
あまりの命に流石のメリッサもたじろぐ。レナに対する恨みが湧いてさえきた。とはいえ、命令拒否はできない。一瞬の逡巡（しゅんじゅん）の後、
「わ、わかりました」
主に対して頷いた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/